ＮＣＧＭの活動が分かる情報誌

# Feel the NCGM Plus

国立研究開発法人
国立国際医療研究センター
NCGM通信

2023.3.28
Vol.6
12月～2月（季刊）

研究所 冬季リトリートの様子

## 11月29日、研究所 冬季リトリートを開催しました

研究所が主催する冬の研究成果を発表するリトリートが、研修棟５階大会議室を会場に現地参加とリモートでのハイブリッド形式で開催されました。

今回も朝8時45分から18時までの長丁場で、各部長・プロジェクト長による23演題の口演発表が行われ、最後まで活発な討論が繰り広げられました。

採点投票により、今年のNCGMRI Director’s Award最優秀賞は、田久保 圭誉 生体恒常性プロジェクト長が、同優秀賞は植木 浩二郎 糖尿病研究センター長が受賞しました。

（詳細は、次ページへ）

NCGMRI冬季リトリート2022の開会挨拶で、満屋研究所長は次のように述べました。

「私達は、いつも新しい事実を究明したいという欲望にかられているわけですが、『世界は、宇宙は、そして私達が研究の直接の対象とする細胞という小宇宙での出来事も、私達の想像を遥かに超えている』わけです。私達はいろいろな制約や過去のルールに囚われる事なく、簡単で最小限のルールだけを用いて、探索を長い間、幾世代も続けなければならないわけです。実験や観察に基づいてのみ検証し、検証した結果についてのみ考えを進め、過去からの、もしかしたら単に引きずってきているにすぎない結論（ドグマという）には、決して重きを置かず、証拠に基づいてのみ、考え、全てを疑う事、これがサイエンスを進める唯一の道である、とこのような事を考えながら、私達は一歩一歩真実の究明に当たらなければならないと思うわけです。今日一日、皆様、発表をお聞きいただき、討論を進めていただきたいと思います。」

運営を担当した考藤達哉 肝炎・免疫研究センター長

セッション１の座長を務めた石坂副研究所長と今井正樹部長

三密とならないよう配慮された会場で各部から発表が行われました

採点結果は「いずれも伯仲した激しい闘い」（満屋所長）でした。
最優秀賞は田久保ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ長が、優秀賞は植木ｾﾝﾀｰ長が受賞しました。

(左から)武井企画戦略局長、國土理事長、田久保生体恒常性プロジェクト長、満屋研究所長、石坂副研究所長

(左から)武井企画戦略局長、國土理事長、植木糖尿病研究センター長、満屋研究所長、石坂副研究所長

閉会に当たって、國土理事長は、NCGMが発行する英文学術誌GHMについて述べ「GHMも発刊され丸３年となります。研究者ご自身の投稿を歓迎するとともに、外部に投稿する時はGHMを引用してほしい」と呼びかけました。

満屋研究所長は「2020年にコロナのために、研究所はロックアウトに近い状態に陥りましたけれど、それぞれの研究部等が間断なく、家で/研究所で、仕事をしていただいた賜物と思います。改めて御礼申し上げ、さらに来年は大きな跳躍台として乗り切っていただき、益々優れた業績を残していただきたい」と述べました。

武井局長は「NCGMが取り組んできたコロナの診療・研究が益々注目され、この研究所の成果が国民の皆様に使っていただけるような発展をしていくのではないかと思っています。来年度さらに素晴らしい研究成果が発表されることを祈念いたします」と締めくくりました。

國土典宏理事長

閉会挨拶を述べる武井貞治企画戦略局長

# 2月15日、GHM High Citation Award 2022の授賞式を開催しました

NCGMが発行する英文学術誌「Global Health & Medicine (GHM)」（編集長：満屋裕明研究所長）は、令和の幕開けとともに2019年10月に創刊され、これまで隔月で順調に発行されています。被引用数の高い論文の執筆者を顕彰するGHM High Citation Award 2022を受賞したNCGM関係者は7名です。2020年12月よりGHMに掲載された論文は、PubMed/PMCに全て収録/掲載され、検索が可能となりました。本年にもインパクトファクターがつくことが期待されています。インパクトファクターは、自然科学などの学術誌が各分野で持つ相対的な影響力の大きさを計測するための指標の一つです。インパクトファクターは、他の学術誌からの引用回数が多いほど、その値が高くなります。数多く引用される論文は、それだけ他の研究者が注目し、参考にしているというしているということを示しています。

GHM High Citation Award 2022の最優秀賞は、南本亮吾 核医学科診療科長です。2月20日、宋 培培GHM室長から表彰状が授与されました。（表彰式には、業務のため不参加）

宋室長は「GHMが一流の国際学術誌となるよう努力してまいります」と述べています。

宋室長と南本亮吾 核医学科診療科長
受賞対象論文：(Review) Effects of COVID-19 vaccination on FDG-PET/CT imaging: A literature review：2021年6月号掲載

伊藤 橋司医師 (Review) Difference in treatment algorithms for hepatocellular carcinoma between world's principal guidelines
2020年10月号掲載

石金 正裕医師 (Communication) A new challenge of unfractionated heparin anticoagulation treatment for moderate to severe COVID-19 in Japan
2020年6月号掲載

廣井 透雄診療科長　　葉山 裕真医師

(Original Article) Elevated high-sensitivity troponin is associated with subclinical cardiac dysfunction in patients recovered from coronavirus disease 2019 2021年4月号掲載

柳内 秀勝国府台病院副院長 (Review) Secondary dyslipidemia: its treatments and association with atherosclerosis 2021年2月号掲載

霜田 雅之膵島移植センター長 (Review) Pancreatic islet transplantation: toward definitive treatment for diabetes mellitus 2020年8月号掲載

(左から)柳内秀勝国府台病院副院長、霜田雅之膵島移植センター長、廣井透雄循環器内科診療科長、國土典宏理事長、杉山温人センター病院長、葉山裕真循環器内科医師、石金正裕国際感染症センター医師、伊藤橋司肝胆膵外科診療登録医

# 日本美術家連盟 島（古田）映子さんから、人間ドックセンターに4点の絵画をご寄贈いただきました

島（古田）映子さんのご主人は、故・古田直樹先生で、1986年にNCGMの前身である「国立病院医療センター」に設置されたばかりの国際医療協力部（当時）に赴任されました。古田先生は1990年に一度異動されましたが、1995年から３年間国際医療協力局長を務められた方です。当時から「まずは、今後外国人の医療にも積極的に関わっていく必要がある。国際交流が進む中で輸入感染症などへの対応も不可欠」とのお考えをお持ちでした。

古田先生ご逝去ののちもご縁があり、島 映子さんから絵画４点を人間ドックセンターにご寄贈いただきました。島さんは、幼少より絵画に親しみ、高校時代には米国へ留学され、ジャクソン・ポロック、マーク・ロスコー、サム・フランシス等の抽象表現主義の影響を受けました。慶応大学卒業後もドイツ・フランスでの生活を通して「ソシュールの言語理論と絵画を結びつけた構造主義的抽象絵画」という、独自の絵画表現を試みてこられました。今日まで絵画活動を続け、文部大臣賞、文部大臣奨励賞をはじめ数々の賞を受賞されています。

寄贈された絵画は、人間ドックセンターを訪れる人、誰もが目にする入口に「蜃気楼」、待合室に「空と海」と題した大作です。また、受付にも「躍動する生命」という作品が飾られています。

人間ドック入口に展示された「蜃気楼」

「絵を拝見して、ぜひ多くの方に見ていただきたい、人間ドックのやさしさを感じてていただきたい、と入口に展示いたしました」と話す梶尾裕・人間ドックセンター長。

島さんは「この絵は真綿を使って、それをニカワで引きのばして、描いています。見方によって全部光が反射するんですね、それで“蜃気楼”というタイトルをつけました。海を中心にして、周りの景色が海に写っている。その時の光の具合を、この真綿で表現したのです」と説明されました。

風格と気品にあふれた大作
「コンポジション4」を前に
國土理事長と語り合う島さん

今回、実際にNCGMを訪問され、「私の絵を、最高の場所に展示していただきましたことに感謝申し上げます。皆さんが、長い間、私の絵を大切にどこに展示するかなどお考えいただいたことがわかり、胸が熱くなり本当に嬉しく思いました。美術作家としては、患者様に明るい心を、寄り添う気持ちを、また癒しを与えられることは、何にも増して嬉しい仕事と感じています」との感想を述べられました。

國土理事長は「こちらこそ、本当にありがとうございました」と感謝の言葉を述べました。

「空と海」という作品の前で。（左から）武井企画戦略局長、島さんの長女で絵本作家の河村日美さん、島さん、國土理事長、梶尾副院長・人間ドックセンター長

## 12月27日、センター病院 木村 壯介名誉院長への瑞宝小綬章叙勲式が執り行われました

令和4年秋の叙勲（11月3日発令）において、木村壯介先生が瑞宝小綬章を授与されました。木村先生は平成20年4月から平成25年9月までセンター病院院長を務められました。

木村先生の在任時に現在の中央棟が竣工し、国立国際医療研究センターの英語名「National Center for Global Health and Medicine（NCGM）」が命名されました。

(前列左から)杉山院長、木村名誉院長、國土理事長
(後列左から)岡野統括事務部長、原副院長、武井企画戦略局長、竹林理事長特任補佐

## 10月、清水孝雄前研究所長が、第17回国際生理活性脂質学会で『生涯功労賞』を受賞しました

清水孝雄 前研究所長は長年にわたり、脂質の研究を続けています。白血球遊走や平滑筋収縮を引き起こすロイコトリエンの生合成に関わる一連の酵素、また、血小板活性化因子（PAF）やロイコトリエン受容体を世界で初めて単離し、阻害剤の開発に貢献しました。さらに、近年は脂質二重膜の多様性ができる仕組みに取り組んで新しい成果を挙げています。これらは450を越える英文論文に掲載され（h-index, 120)、多くの国際学会で発表されています。

ほかにも100人を越える大学院生を指導し、20名以上が大学教授や国内外の研究室PIとして活躍していることも評価されました。去る10月末にニューオリンズで開催された国際学会で表彰されました。

写真：中央に清水孝雄 前研究所長

## 12月、電子カルテ改革の社会実装のシンポジウムが日経SDGs FESTIVALで開催され、美代センター長が講演しました

國土理事長が座長を務めるMEJ四次元医療改革研究会において、電子カルテ改革が進められています。昨年度の改革提言に引き続き、今年度は、電子カルテ改革の社会実装をテーマとして、12月8日に日経SDGs FESTIVALにおいてシンポジウムが開催されました。

美代賢吾医療情報基盤センター長を座長として、医療の質と安全の向上、データ利活用による臨床研究の推進、医療従事者の働き方改革について、電子カルテベンダー、製薬協、医学研究者、診療所の医師と、議論が進められました。現地とリモートで1,800名の参加者があり大変盛況なシンポジウムとなりました。

その後、12月15日には、シンポジウムで議論した「電子カルテ改革の社会実装」の提言書が、MEJ笠貫宏理事長とMEJ電子カルテ改革分科会長でもある美代センター長によって、加藤勝信厚生労働大臣に提出されました。

講演する美代医療情報基盤センター長

## 12月17日、オンライン市民公開講座「知っておこう！ 最新のがん医療と暮らしのこと～乳がん～」を開催しました

９人に１人の日本人女性が乳がんにかかるといわれています。今回の市民講座は、乳がんの診療や治療に対する正しい知識を身につけていただくとともに、がん治療と暮らしの両立について役立つ情報を提供するために開催されました。

北川大・乳腺内分泌外科診療科長は、初期治療に関する「乳がんの理解と診断、治療とトピックス、ガイドラインの利活用」について分かりやすく説明しました。最後に「患者さん側も我々もうまく情報を活用し、自分たちが考えていること、医療者側だけでなく、患者さんもどういうことを希望します、ということの意思疎通をキャッチボールのように行い、最終的にその患者さんに最適な治療を選ぶ、Shared Decision Making（協働による意思決定）を実践できたらいいと思います」とまとめました。

北川診療科長　司会の清水千佳子診療科長

「がんと向き合いながら暮らすために大切なこと」を講演した桜井なおみさん（CSRプロジェクト代表理事）

# ACCの25年 これまで、いま、これから

エイズ治療・研究開発センター（ACC）は、HIV訴訟に関する平成8年3月29日付けの和解確認書を踏まえ、恒久対策の一環として、平成9（1997）年4月1日に設置され、2022年に設立25周年を迎えました。

センター病院アトリウムでの展示（上）とパネルから一部抜粋（下）

## 1986年夏、「大変な病気だ」と衝撃を受けた

**― どのような経緯でエイズ治療に携わるようになったのでしょうか。**

**岡**　もともとレジデント時代に健康長寿センターの感染症科で働いていまして、感染症分野に面白さを感じていました。当時の医長だった島田馨先生が東京大学医科学研究所（医科研）の教授として異動され、僕も追いかけて医科研に移りました。それが1986年で、ちょうど島田先生がエイズ診療を始めた頃のことです。

世界エイズデー前日の11月30日夕方から、中央棟B1Fのアトリウムで設立初期の出来事やスタッフの想い、25年間の歩みなどをご紹介するパネル展を開催、ACC公式YouTubeチャンネルでは岡慎一センター長による『エイズ 10のQ&A』を公開しました。
治療法の進化により、HIV感染症はもはや死の病ではありません。ただし、正しい情報がアップデートされず、病気への偏見・誤解が解消されずにいます。HIV感染者の受け入れに消極的な医療機関や介護・福祉施設などもあります。
ACCは院内外の関係機関の皆様にご支援いただいており、この場をお借りして御礼申し上げます。
今後とも引き続き、ご指導賜りますようお願いいたします。

パネル展詳細は、こちらのQRコードから
ACCホームページにアクセスしてご覧ください。

清瀬の風

# モンゴル母子保健関係者への支援と交流；事業参加と訪問団受け入れ

国立看護大学校　看護学部　准教授　日置　智華子
国立看護大学校　看護学部　准教授　渡邊　香

2022年8月、短期専門家としてJICAプロジェクトに参加しました。日本における助産師のキャリアパス、クリニカルラダーに関する情報を共有し、グループワークでキャリアパスを作成しながら、モンゴルの助産師に必要な卒後研修ガイドラインの項目を検討しました。

モンゴルの助産師たちが、次世代の育成に向けて、自身の能力開発に向けて邁進する姿に、助産師の力強さは万国共通なのだと実感しました。（日置 智華子）

モンゴルでの理想の助産師像をイメージしながらキャリアパスをグループワークで作成しました。

2022年11月、モンゴル母子保健関係者が来学され、日本および本学の助産学教育に関する講義に熱心に参加されました。また、実習室にて教材（本学の産学連携開発品の産褥乳房模型等）の見学、教員による分娩介助模擬授業の見学と意見交換を行い、参加者の助産技術への関心の高さと熱意に圧倒されました。

近年、モンゴルでは新生児死亡率が改善されつつも、妊産婦死亡率改善の遅れを取り戻そうという強い意志を感じました。（渡邊 香）

日本の助産師基礎教育について講義する渡邊准教授

分娩介助技術について講義する日置准教授

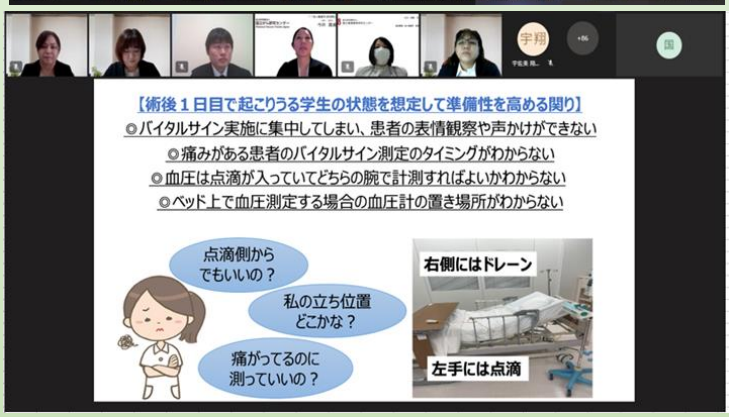
実習室で分娩介助デモンストレーションとディスカッションを行いました。

清瀬の風

# 令和4年度保健師助産師看護師実習指導者講習会を開催しました

国立看護大学校　研修部長　亀岡智美

国立看護大学校研修部は、令和4年9月14日から11月18日まで、保健師助産師看護師実習指導者講習会を開催しました。これは、看護学生の実習指導に携わる看護師の能力向上を目的とし、厚生労働省が認定している講習会です。国立国際医療研究センターは、国立看護大学校が開学した平成13年度にこの講習会を開始し、コロナ禍により中止となった令和2年度を除き、毎年開催しています。令和3年度からは、全教育課程（8科目10単位＋特別講義4回）がオンライン開催になり、その２年度目となる今年度は、国立高度専門医療研究センター、国立ハンセン病療養所、国立病院機構関東信越グループの病院に勤務する看護師53名が受講し、全員が修了証書を手にしました。




オンラインで受講された皆様（上）
実習指導案発表会の様子（下）

講習会開催中は、連日、9時30分から18時20分まで授業が行われました。文字通り「朝から晩まで」パソコンの前に座り、講義を受け、文献を読み、仲間と意見交換を重ねることは、受講者の皆様にとって決して楽でなく、オンライン授業の仕組みを使いこなせるようになるだけでも大変であったに違いありません。しかし、全員が、高い熱意、知的好奇心、集中力をもって受講し、その成果は、最終日の11月18日、全期間を通して完成した実習指導案の発表会を通し披露されきました。

今後、この講習会を受講し、修了した皆様が、獲得した成果や経験を活かし、看護学実習に臨む学生への指導、後輩育成等の場で更に活躍されることを期待しております。

清瀬の風

# ラオス人民民主共和国との看護師国家試験・免許制度を通じた交流

国立看護大学校 看護学部 教授　森 真喜子

ラオス人民民主共和国は、ASEAN資格相互承認協定に基づき、ASEAN地域で通用する保健人材育成に取り組んでいます。2014年に保健人材に関する法規が改正され、看護師等に国家試験の合格、医療機関における経験等の要件が課されることとなりました。

そこで、同国政府の要請により、JICA・NCGMの連携による「持続可能な保健人材開発・質保証制度整備プロジェクト（DQHPプロジェクト）」が2018年から実施されています。プロジェクトはラオスの看護助産委員会を主なカウンターパートとして、①免許等に関する法令文書の整備、②看護師国家試験の実施、③看護インターン研修の実施の3つに関する支援を行っています。

私は、日本の保健師助産師看護師国家試験委員会での経験から、2021年6月に国家試験アドバイザーに就任しました。JICAやNCGM国際医療協力局より現地に派遣されている優秀な専門家と連携しながら、ラオスの看護教育課程のカリキュラムと国家試験出題基準の整合性を評価し、出題基準の改定や試験問題の質向上に向けた提案、合否判定の基準に関する助言を担当しています。

関係者のご尽力により、2023年2月にはラオスでの交流を行う予定です。NCGMからつながった貴重な経験と新たな出会いに、心から感謝しています。

国家試験アドバイザーとして日本から遠隔でコメントする様子

## 【国立看護大学校について】

2001年に厚生労働省により、国立高度専門医療研究センター（ナショナルセンター）の看護職を養成する看護学士課程として設立され、日本の看護基礎教育のモデル校として位置づけられています。

東京都清瀬市の緑豊かなキャンパスで、「心と心が通い合う、人間的な看護」というヒューマンケアの理想を基盤に、国際社会に対応できる人材を育成しています。

国立看護大学校の公式Webサイトはこちらからご覧ください。

こうのだい通信

# 11月19日、河合診療科長が、第26回日本心療内科学会学術大会総会で表彰されました

国府台病院、河合啓介心療内科診療科長は「第16回日本心療内科学会学術賞（河野賞）」を受賞し、同学会総会で表彰されました。

受賞論文は、日本心療内科学会誌　第25巻第1号に掲載された「摂食障害治療支援ネットワークの現状とその課題―千葉県の摂食障害診療の調査―」です。

河合診療科長は、次のように語りました。「この疾患は専門医が少なく、患者さんは専門医療施設を見つけることに苦労しています。受賞を励みに、この課題の解決を引き続き進めていきます。」

学会の久保千春理事長（左）と河合啓介診療科長（右）

センター病院診療科シリーズ No.1

# 歯科・口腔外科

当科は、基礎疾患をお持ちの患者さんや開業歯科医院での対応が困難な患者さんの歯科治療などに加え、周術期の口腔ケア、NSTやRST、緩和ケアなど院内各科との密接な連携のもとに入院加療も含め幅広く行っており、病診連携も積極的に進めています。

顎骨骨折などの外傷、歯性感染症、難抜歯、顎関節症、口腔粘膜疾患、口腔腫瘍など顎口腔領域に発生するあらゆる疾患に対応しており、歯や骨の移植術、人工歯根を用いた欠損部の咬合再建なども行っています。特に顎変形症や進行性下顎頭吸収、顎口腔領域の血管腫（血管奇形）については受診患者数が大きく伸びています。従来は切除等しか対処方法がなかった大きな血管奇形に対して「レーザー複合照射法」を用いて治療しており、全国から紹介にて難症例が受診しています。

また臨床研究に加え、医工連携も積極的に進めており、医療機器としてのマーカーの開発も手がけています。

（歯科・口腔外科診療科長　丸岡豊）

センター病院診療科
シリーズ No.2

# 腎臓内科・血液浄化療法室

腎臓は体内の恒常性を維持し、造血やカルシウム代謝にも関わる重要な臓器です。近年は糖尿病・高血圧など生活習慣病を背景とした慢性腎臓病（CKD）の増加が問題であり、心血管疾患の合併症が多いことから、全身を総合的に診療する必要があります。

当科の診療範囲は、腎炎・ネフローゼ症候群・腎不全（急性・慢性）・体液異常（電解質異常・酸塩基平衡異常・高血圧など）など多岐に渡り、特に専門である腎病理を生かし、科学的に正しい診断と最適な治療を重要視しています。

身体面だけでなく社会・精神面での支援も心がけ、各科医師・スタッフと綿密に連携し、保存期腎不全から腎代替療法まで、途切れのない医療も心掛けています。

一方、血液浄化療法も当科が担う重要な役割です。血液浄化療法室では、血液透析の新規導入や入院中の血液透析を行い、他にも病棟での出張透析や、ICUなどでの持続的腎代替療法（CRRT）も行います。重点領域である急性期から慢性期まで各病期に対応し、全ての血液浄化療法（選択的血漿交換療法（SePE）など）に対応可能です。

ベッド数は10床（内2床は陰圧で感染症に使用可）で、医師・看護師・臨床工学技士が協力し重症例でも細やかな管理を行います。最新の全自動透析液作成装置を用いたオンラインHDFも導入し、特殊な場合限定ですが外来透析も開始しました。

腎生検施行中の様子

リニューアルした血液浄化療法室

さらに快適な透析時間を過ごせるよう、ベッド毎にモニターも新設しました。出張可能な多用途血液浄化装置は5台を有し、最適な治療法を積極的に選択しています。

他にも、腹膜透析室も併設しており、外来での通院治療も可能です。腹水濾過濃縮再静注療法（CART）も装置も一新し、各科の依頼に応じて迅速に行っています。

（腎臓内科診療科長　髙野秀樹）

研究所部門シリーズ No.1

## 熱帯医学・マラリア研究部

### ～ラオス国立パスツール研究所と、ラオスのゼロマラリア達成を目指します～

NCGMとラオス国立パスツール研究所（IPL）が2011年に共同研究協定（MoU）を締結して以来、当研究部はラオスのマラリア排除達成に向けた共同研究、若手研究者育成を行い、ラオス政府の政策立案にも貢献してきました。

2014年から5年間、JICA/AMEDのSATREPSプロジェクト「ラオス国のマラリア及び重要寄生虫症の流行拡散制御に向けた遺伝疫学による革新的技術開発研究」の採択を受け、多くの研究成果を挙げました。

その後コロナ禍の約3年間も、IPLに当研究部の分室（Laos-Japan Parasitology Laboratory）を維持して、日本企業とのマラリア診断技術／治療薬開発のための臨床研究を展開してきました。

そして昨年度、新たなSATREPSプロジェクト「革新的技術を活用したマラリア及び顧みられない寄生虫症の制圧と排除に関する研究開発」が採択されました。2023年から5年間、同国のマラリア排除に向けて一層邁進します。

フィールドワークを行う石上（いわがみ）盛敏・熱帯医学研究室長（写真左）

研究所部門シリーズ No.2

## 感染症制御研究部

感染症制御研究部では、ここ10年程度、次世代シーケンサを利用した解析に注力しています。
当部は、以下の研究を行っていて、幅広い分野で、サンプル核酸の調製、次世代シーケンサ解析のためのライブラリ化、得られたデータのバイオインフォマティクス解析も実施しています。

（写真:秋山徹部長）

- ✓ 世界初となる病原体の完全ゲノム解析
- ✓ ベトナム大規模病院との共同研究による多剤耐性菌の分子疫学的ゲノム解析（各菌種の薬剤耐性因子の保有状況などの検討）
- ✓ センター病院で分離される薬剤耐性のSNPレベルでの関連解析
- ✓ センター病院で10年あまりの間収集された結核菌株の菌株間関連解析
- ✓ センター病院などで実施された大腸内視鏡被検者の便や唾液のマイクロバイオーム解析
- ✓ 東京女子医科大学、愛知学院大学等との共同研究による新種病原体の同定
- ✓ 金沢大学とのレンサ球菌に関する共同研究
- ✓ 神奈川大学とのミドリゾウリムシに関する共同研究

研究所部門シリーズ No.3

## 難治性疾患研究部

小児科研修医時代、私は、亜急性硬化性全脳炎やゴーシェ病、ユーイング肉腫や先天性十二指腸閉鎖症など、たくさんの難病の子どもらに逢い、基礎研究の必要性を感じてこの領域に入りました。以来、難治性疾患研究部は、臨床に役立つエビデンスを得ることを目標とし、現在、病院との共同研究として、コロナ後遺症（膠原病科）、エイズと癌（ACC）、コロナウイルスに対する抗ウイルス分子の導出(DCC)に関する研究を進めています。長年の夢だった組み換え蛋白質による細胞加工技術開発については、長い時間を要しましたが、このたびやっと論文化できました。このシステムでは、最速1週間でヒト体細胞から肝幹細胞様細胞の調製が可能で、現在、先天性肝疾患への応用に向け準備中です。コロナウイルス感染症を通して、私たちは改めて、科学が「希望の光」になることを経験しました。研究成果が難病で苦しむ患者さんたちの福音になることを念じて、さらに励んで参りたいと思います。

（部長　石坂幸人）

研究所部門シリーズ No.4

## 遺伝子診断治療開発研究部
### ～生活習慣病の精密医療実現を目指して～

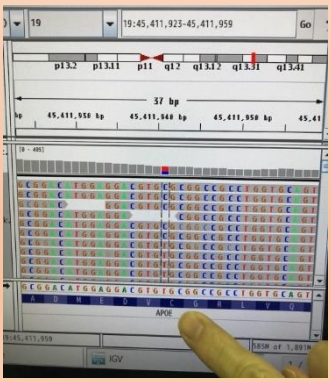
当研究部では、心血管病とその危険因子（高血圧など）をはじめとする生活習慣病の精密医療の開発・実用化に取り組んでいます。

近年注目を集めている精密医療とは、遺伝情報や生活環境、ライフスタイルの違いから特定の集団を層別（グループ）化して、集団ごとの治療法・予防法を提供しようとするアプローチです。生活習慣病は、高齢化とともに人々のADLに多大な影響をもたらしますが、社会全体で見た場合、治療レベルは未だ十分と言えません。

その一因は、遺伝要因と非遺伝要因（生活習慣など）が絡み合って発症する多因子疾患であるため、個人個人に有効な治療戦略を提示することが容易でないからです。

私たちの研究は、病気に罹りやすい“体質”を、ゲノム情報として解読するとともに、不摂生な生活習慣などに暴露された“痕跡”もエピゲノム情報として抽出し、両者を組み合わせることで、各人の病気の発症や予後の予測に役立てようというものです。

（部長 加藤規弘）



遺伝子診断のためのシーケンス解析

## 12月7日、藤原綾 疫学・予防研究部特任研究員が、Young Investigator Excellent Abstract Awardを受賞しました

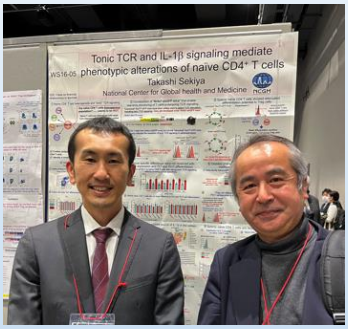
22nd IUNS-ICN International Congress of Nutritionでの発表では、国民健康・栄養調査のデータを用いて学校給食の影響を検討し、ビタミン・ミネラルのような必須栄養素の摂取量や、食品群では豆類、きのこや海藻を含む野菜類、魚介類、牛乳の摂取量への学校給食の寄与が大きいことを報告しました。藤原特任研究員は「国際学会での口頭発表は初めてでしたが、研究部でのディスカッションやNCGMの英語研修のおかげもあり、受賞の運びとなりました。今後も日本の公衆栄養の発展と人々の健康に貢献できるよう努めてまいります」と語りました。

受章題目は「What Japanese children eat in school lunches: findings from the National Health Nutrition Survey 2012-2019」です

こうのだい通信

## 第51回日本免疫学会学術集会への参加活動報告

2022年12月7日から9日の三日間にわたり、熊本市にて開催された日本免疫学会学術集会に、NCGM肝炎・免疫研究センター免疫制御研究部から関谷高史室長と高木智部長が参加しました。本集会は、国内外の免疫学研究者が集まり、最新知見について熱く議論する場となっています。今回は、末梢ナイーブT細胞の多様性とエフェクター細胞分化への影響および分子機構についての成果を発表し議論しました。多くの参加者が久々に対面形式での討論を行い、活気にあふれ、大いに刺激を受ける機会となりました。




関谷室長(右) 高木部長(左)

口演の様子

くまモンも応援に駆けつけてくれました！

# NCGMとタイ・マヒドン大学熱帯医学部との間でMOUが継続締結されました

NCGMとマヒドン大学熱帯医学部（FTM-MU）は、包括的連携協定(MOU)の延長に合意し、11月23日にNCGM國土理事長がまず署名を行いました。そして署名された協定書はバンコクに運ばれ、12月7日署名式典が行われました。

FTM-MUのDean、Assoc. Prof. Weerapong Phumratanaprapinが署名し、証人としてFTM-MUからProf. Srivicha Krudsood (熱帯衛生学)、Prof. Kesinee Chotivanich（臨床熱帯医学）、NCGMから狩野繁之（研究所 熱帯医学・マラリア研究部 部長）、矢野和彦（同研究部 上級研究員）、Nattha Kerdsakundee (臨床研究ｾﾝﾀｰ ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙﾄﾗｲｱﾙ部ﾀｲ地域ﾏﾈｰｼﾞｬｰ)が臨席しました。

今回、MOUの５年間の延長により、NCGMとFTM-MUは、互いの研究機関としての長所を再確認することでマラリアをはじめとする熱帯感染症やその他関連する疾患の予防や治療、流行対策に資する国際共同臨床研究の発展を目指します。

MOUに署名をするWeerapong熱帯医学部長（左）

（左から） Kasinee教授、Srivicha教授、Weerapong学部長、狩野部長、矢野上級研究員、Natthaタイ地域マネージャー

# 11月22日、韓国の国立中央医療院の代表団が、25日/29日、ブータン使節団が国際感染症センター（DCC）を訪問しました

韓国の国立中央医療院（NMC: National Medical Center）から8名の代表団を迎えました。初めに大曲センター長が、新興感染症対策におけるNCGMの役割、日本のCOVID-19対応、WHO連携を含む国際協力について説明しました。続いて、今後の感染症対策における役割や課題について、率直な意見交換が行われました。

そののち、代表団はDCC新感染症病棟を熱心に視察しました。

活発な議論の中で、日本と韓国において、COVID-19パンデミックを含む、感染症対策に関する共通の課題も多く認識され、今後に繋げる有意義な機会となりました。

韓国NMC代表団とDCCのメンバー

新感染症病床について説明する森岡医長

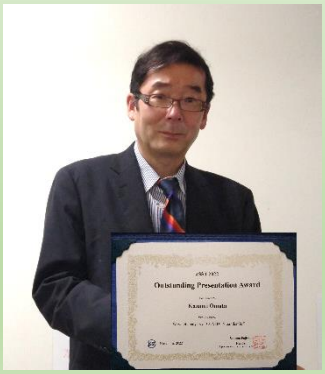
25日にはブータン王国保健省から2名、同国王立医科大学から1名、JICAから3名がDCCを訪問しました。大曲センター長より日本のCOVID-19対策の推移、森岡医長よりNCGMのDCCにおける新興・再興感染症対策、石岡医師よりASPIRE「抗微生物剤のアクセスと規制」の取り組みについて、野本医師より医療廃棄物のフローについて、呼吸器内科 高﨑医長より日本の結核対策について、それぞれ講演しました。

また、29日にブータン王国 保健大臣がDCCを訪問しました。國土理事長、武井企画戦略局長を交えて、日本およびブータンの新興・再興感染症対策、並びにAMR対策などについて議論を交わし、これからも連携協力を強化していくことを確認しました。

ブータン王国保健大臣（中央）および使節団一行とDCCのメンバー

## 尾又一実 データサイエンス部・数理疫学研究室長が、Outstanding Presentation Awardを受賞しました

受賞した講演は、2022年8月31日～9月2日に開催されたThe 41st JSST Annual International Conference on Simulation Technologyで行われました。
尾又室長の発表では、国内の都道府県別COVID-19陽性者数時系列データの中に認められる感染波を、ウェーブレットという数理科学的手法によって統計学的に分析し、感染波の地理的な拡大における規則性および確率性を明らかにしました。尾又室長は「COVID-19感染拡大は2022年末の時点でも終息の兆しが見られず、疫学データの収集と解析を引き続き実施し、流行拡大の様子をモニターしていくことが重要です。また近年、医療分野におけるデータサイエンスの有効性の理解が進んできており、若手研究者がこの分野に続々と参入してくることを望んでいます」と語りました。




尾又室長の受賞題目は「Wavelet analysis of COVID-19 pandemic」

こうのだい通信

## 12月11日、吉信研修医が日本リウマチ学会関東支部学術集会で、優秀研修医奨励賞を受賞しました

同会の学生・研修医奨励賞セッションにおいて吉信美紀（よしのぶ・みき）研修医が受賞した演題は『多彩な腸管外病変を伴う潰瘍性大腸炎の加療中に多発血管炎性肉芽腫症を合併した1例』です。吉信研修医はリウマチ・膠原病科のローテート期間中に受け持った患者さんの消化器領域と膠原病領域にまたがる全身性疾患の複雑な経過をまとめ、その症例提示とディスカッション内容ともに優れた演題発表と評価を受けました。

（左から）増井医師と吉信研修医

吉信研修医は「初めての学会発表でこのような賞をいただき大変うれしく思います。リウマチ科の先生方には研修でも今回の発表準備でも熱くご指導いただきました。特に指導医の増井先生にはスライド作りや論文探しなど一からご指導いただき、お忙しい中いつも丁寧に相談に乗ってくださいました。心から感謝しております。膠原病は経過が長く問題が多いため、病歴を追うのに苦労しましたが、同時に奥深さも知ることができました。今回の経験を生かし、今後も精進してまいります」と話しています。

# 国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！　ラオス人民民主共和国 Vol.15

**国際協力機構（JICA）ラオス人民民主共和国**
**病院の保健医療サービスの質および財務管理改善プロジェクト（質改善）**
**長期派遣専門家　市村 康典（医師）**

2022年5月にラオス南部にあるパクセー市（国の中で3～4番目の都市です）に着任して10か月が過ぎ、初めての“冬”も経験しました。ただここは南国、冬でも朝は10℃半ば、昼は30℃を少し超える過ごしやすい“冬”でした。

プロジェクトでは、対象としているラオス南部の4県で、病院の保健医療サービスの質と財務管理を改善すべく、保健省や各県の行政担当者、病院職員とともに、仕組み作りや研修などを行っています。

質改善分野では、保健省や各県と協力して、保健省が策定した医療の質に関する基準による評価を行い、病院での実態に応じた改善に取り組んでいます。

直前での活動の決定、様々な交渉、陸路（ガタガタ道）での各県への移動などを経験しつつ、活動を一歩一歩進めています。

2022年10月に開催した研修で
4県の県保健局担当者と市村医師（左）

# 第118回日本精神神経学会学術総会（研修医・専攻医セッション）にて、優秀発表賞を受賞して

**国府台病院心療内科レジデント1年目　長谷川遥菜**

研修医2年目の時に研究に着手し、総合内科の酒匂科長をはじめ心療内科・精神科の先生方のお力添えをいただきまして、今年6月に初めての学会発表で賞をいただきました。演題名は「レセプト情報・特定健診等情報データベース（NDB）オープンデータを用いた摂食障害の臨床疫学」です。摂食障害の治療実態の理解が深まり、発表とディスカッションを含め非常に良い経験となりました。このような過分な賞をいただき身が引き締まる思いであると同時に、一層日々の研修や勉学に精進しようと思う次第です。ご指導下さった先生方に御礼申し上げます。

筆者（左）と酒匂科長

## 2月11日、薬剤耐性あるある川柳の入選作品が発表されました

医療従事者部門の入選作品

一般部門の入選作品

6回目となる「薬剤耐性(AMR)あるある川柳」に、全国から1,777作品が寄せられました。

抗菌薬・抗生物質は細菌が増えるのを抑えたり、殺したりする大切な薬です。しかし、抗菌薬・抗生物質を不必要・不適切に使用していると、本来ならば効くはずの細菌に対して効かなくなることがあり、これを「薬剤耐性（AMR: Antimicrobial resistance）」といいます。2019年4月にWHOが国連事務総長宛に出した報告書*では、AMRに対する持続的な取り組みがなければ、2015年から2050年の間に高所得国でおよそ240万人が死亡する可能性があること、また2008年から2009年の世界金融危機に匹敵する経済的ダメージを受ける可能性があると述べています。

* https://www.who.int/publications/i/item/no-time-to-wait-securing-the-future-from-drug-resistant-infections

## 研修医の窓　臨床研修で得られるもの、還元できるもの

センター病院 研修医2年目・越智　航

NCGMにおける臨床研修にも終わりが近づき、同期の皆がそれぞれ別の方向へ歩み始めているのを日々感じます。医局から寮への帰り道がわからず迷った1年目の4月がつい最近のことのようです。

2年間の研修では働きながら臨床の初歩を身につけ、学会発表の機会もいただきました。加えて多くの診療科の多くの上級医の先生方の姿を間近に見て、将来の自らを想像しながら働くことができ、大規模なNCGMだからこそ得られた経験だと感じています。一方で、さまざまな科や他職種の方々とコミュニケーションをとりやすい環境にあることや、たくさんの同期といつでも相談し互いに高め合えることは、NCGMに還元できるものだと感じました。

2年間、期待を超える臨床研修生活を送ることができたと確信しています。この風土が引き継がれ、未来の学生に研修への期待を膨らませるものであり続けることを願っています。

# 北海道の大自然を感じてみよう！

センター病院小児科子どもの療養環境を考えるWG一同

北海道の『そらぷちキッズキャンプ』と株式会社円谷プロダクション運営『ウルトラマン基金』の共催でWeb配信イベント『ウルトラキッズプロジェクト』が開催されました。これは、全国の病院や施設をオンラインでつなぎ、“一緒にウルトラマンを応援しよう”というイベントです。

NCGM小児病棟でも、プレイルームや病室から子ども達がご家族と一緒に参加され、スタッフも童心に帰り、気持ちを一つにしてウルトラマンを応援しました。

北海道の大地に現れた怪獣に力を合わせて立ち向かうウルトラマン達の姿に、子ども達の表情も真剣です。両手を胸に当て、思いを込めて「ウルトラチャージ！」を送ります。この瞬間は、恥ずかしがりながらもウルトラチャージを交換する子や、大人のポーズを真似っこしてお気に入りの怪獣のおもちゃをアピールする子ども達と“My ウルトラチャージ”でエールを送りました。

今回のイベントでは、プレイルームで“はじめまして”の出会いがあり、子ども達はちょっぴりドキドキしながら、怪獣のおもちゃで秘密のコミュニケーションを取っていました。

ウルトラマンへの興味が沸いてきた子は、一人ひとりのドラマを興味津々に質問し、ウルトラマンにとても詳しくなったり…。お部屋に戻る前には、手術を控えている子に会場のみんなでウルトラチャージを送りました。

『ウルトラキッズプロジェクト』を通じて、お互いを応援しあう、とてもあたたかな時間を共有することができました。イベントを企画運営してくださったすべての皆さまに心より感謝いたします。

本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。

企画・発行：
NCGM 広報企画室

https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html
バックナンバーはこちらからご覧いただけます。